

「会員短信 46」

「ええ格好しい」 桑田愛子

生来、小心者の割に「ええ格好しい」なので、句作の際に格好を付け過ぎないように気を付けている。実作のみならず重要な局面で大切にしている言葉が、八木会長の「上手くみせようとする緊張するよ」である。これは、愛媛CATVの句会番組「八木健の俳句遊遊」に出演の際、八木会長からいただいたものだ。以来、大事な場面では必ずこの言葉を思い出している。

初めて俳句の賞をいただいたのは、中学生の時の俳句大会である。「青蛙<sup>こゝろ</sup>拈華微笑<sup>ねんげみしょう</sup>の雨の中」という

句で、今思うと中学生特有のナルシズムに溢れていて赤面の至りだ。しかし、そういった青臭さも含めて、今となっては記憶の中で一番古い拙句として、学生時代の良き思い出と共にある。

青蛙の句を私の「初めの句」とするならば、「終わりの句」即ち辞世の句もあるのだろう。辞世の句は今生を振り返ったもの、来世への思いを詠んだものである。まさに自分の人生の来し方行く末を詠み、生き様が現れるものだ。とすると、私の辞世の句には、小心者で、ええ格好しいの生き様が現れるのだろうか？ 辞世の句を詠む時も「ええ格好」をし過ぎないように、せめて肩の力を抜きたい。

もっとも、今からこんなことを考えていること自体、すでにしみじみと「ええ格好しい」である。

針に糸通せぬ母に花の雨  
ワイパーのデュエットキュキュキュ梅の雨  
拝啓の後の続かず蝉時雨